

王漁洋の『唐賢三昧集』について

岡田祥子

一

王漁洋（一六三四—一七一）が、盛唐詩の総集である『唐賢三昧集』三卷（以下『三昧集』）を選定したのは、父の喪に服していた康熙戊辰二十七年（一六八八）の秋、五十五歳の時であった。漁洋は『三昧集』について、「唐賢三昧集序」（『漁洋文』巻一、以下『三昧集序』）につぎのように述べている。

敵滄浪詩を論じて云ふ、「盛唐の諸人は、唯だ興趣に有るのみ、羚羊角を掛け、跡の求むべき無し。透徹玲瓏として、湊泊すべからざること、空中の音、相中の色、水中の月、鏡中の象の如し。言は尽くること有れども、意は窮まる無し」と。司空表聖詩を論じて亦云ふ、「味は酸鹹の外に在り」と。康熙戊辰の春杪、京師より帰り、宝翰堂に居る。日に開元・天宝の諸公の篇什を取りてこれを読み、二家の言に別して会心する有り。其の尤も雋詠超詣なる者、王右丞より下四十二人を録し、『唐賢三昧集』を為り、釐めて三巻と為す。

右の序に記される敵羽の詩論は『滄浪詩話』詩辯に見られ、司空図の言葉は「李生と詩を論ずるの書」（『司空表聖文集』巻

王漁洋の『唐賢三昧集』について

第二一鳴集 雜書）の中に見えるのであるが、この序は、敵羽のいう「言葉は消えてしまっても、そのおもいは窮まりない、そんな趣を持った詩がよい」と、司空図の「酸鹹の外にある何とも言葉に言い表せない風味を持った詩がよい」という二家の詩論に、格別に心が動かされたので、そのような味わいを持った詩篇を選んで、『三昧集』三巻を編んだと述べているのである。

ところが『三昧集』は、漁洋自ら言うように、盛唐詩の総集であるにもかかわらず、李白・杜甫の詩篇は全く収録していない。

その理由を同じく『三昧集序』の中に、李杜二公を録さざるは、王介甫が百家の例に仿ふなり。

と述べている。「王介甫が百家」とは、王安石が四十歳の嘉祐庚子五年（一〇六〇）に選定した『唐百家詩選』二十卷（以下『百家詩選』）を指し、この一文は、『三昧集』が李白・杜甫の詩篇を収録しなかったのは、王安石の『百家詩選』が李白・杜甫の詩を一篇も収録していないことにならったものだと言っているのである。

すなわち『三昧集』の序は、この集が敵羽・司空図の詩論に基づき、その上王安石の『百家詩選』にならって、李・杜を除いた盛唐の詩人、或いは詩篇の選択をしたという二つのことがらを述べていると言えよう。

『三昧集』が世に出るとたちまち総集としての価値を云々する議論が多数起ったのは、主としてその選択をめぐってのこと

であった。

たとえば康熙詩壇にあって、漁洋と相互に交流もあった沈徳潜（一六七三—一七六九）は、自ら編んだ『唐詩別裁集』序につきのように述べている。

新城の王阮亭尚書、⁽²⁾『唐賢三昧集』を選するに、司空表聖の「一字を著けずして、尽く風流を得」、嚴滄浪の「羚羊角を掛け、跡の求むべき無し」の意を取る。蓋し「味は塩酸の外に在り」。而れども杜少陵云ふ所の「鯨魚碧海」、韓昌黎云ふ所の「巨刃摩天」なる者に、或ひは未だこれ及ばず。吾因りて杜・韓の語意を取り、『唐詩別裁』を定むるも、新城の取る所も亦兼ね。

この序は、『三昧集』が、司空図・嚴羽二家の詩論に基づいて詩篇が選択されてはいるものの、杜甫・韓愈の詩句に見られるような、力強い気魄の作品が欠けているので、そのような雄大な詩風を取り入れて、『唐詩別裁集』を編み、かつ漁洋の意に適うような詩篇も収録しておいたと述べているのである。

沈徳潜はもとより全面的に『三昧集』を否定しているわけではないが、杜甫・韓愈に代表される高揚した精神を写す唐詩の一つの重要な側面が欠落していることに物足りなさを感じているのである。他の批評家たちも⁽³⁾『三昧集』が李白・杜甫・韓愈のような絢爛・雄渾・豪放の詩風で知られる大詩人を除いたことに不満を抱き、『三昧集』は静謐典雅ではあるが、いささか力強さに欠けるスケールの小さな選集であるとして、高くは評価しなかった。だが考えてみれば、多くの批判があったという

ことは、たとえ一時でも人々が『三昧集』を迎えた証拠ともいえよう。

一般に康熙二十年代の詩壇は後にもふれるように、明代の李攀龍・王世貞に代表される古文辞派の流れを継承し、盛唐の詩でなければ目標とせず、しかも李白・杜甫の豪放・雄渾の詩風をまねて詩作するのを佳しとする風潮が依然として根強かった。このような風潮を打開し、なんとか新しい詩風をと願う人々に、『三昧集』が公刊されると、収録されている詩篇は力強さに欠けるとはいえ、その清新さが迎え入れられたものと思われる。『雪橋詩話』卷三に、林佶（吉人）⁽⁵⁾が『唐賢三昧集』に識した序を引いて、『三昧集』選定より数年後の漁洋の身辺を写して、

其の盛時に当りては、門に及びて業を受くる者、亡慮百千人。

と記す。これは漁洋の詩論に賛同するものが、最盛時にはその門に多く集まって来たことを伝えているものである。

この点は『三昧集序』に表明されていた他のこととがらに関連する。これが司空図・嚴羽の詩観に基づいて漁洋の唱えた「神韻説」と密接に関っていることは今さら言うまでもないが、『三昧集』は、かれの「神韻説」を理解する最もよい手がかりとして、人々に読まれたものであろう。

なぜなら漁洋は、自ら提唱した「神韻説」を説明するのに、直接自分の言葉で明らかに定義を下すことはいっさいせず、嚴羽の論ずる「興趣」と、司空図の「味外の味」なる語句をしば

しは用いることにより、古人或いは自作の詩篇を示して直接の説明に代えたからである。それ故読者は、漁洋の取り上げた詩篇の趣を理解することによって、漁洋の言わんとする「神韻説」の意を汲まなければならなかった。

たとえばつぎのような例がある。

律句に神韻天然にして、湊泊すべからざる者有り。高季迪（啓）の「白下の山皆郭を繞る有り、清明に客の家を思はざる無し」、曹能始（学佺）の「春光白下多日無し、

夜月黄河第幾湾」、李太虚（明齋）の「節は白露を過ぎて猶ほ熱を余し、秋は黄州に到りて始めて涼を解く」、程孟陽（嘉遂）の「瓜歩江は空しうして微に樹有り、秣陵天遠くして秋に宜しからず」の如きは、是れなり。余に昔、「燕子磯に登る」の句有りて云ふ、「呉楚青蒼極浦を分ち、江山平遠新秋に入る」は、或ひは庶幾からん。

それでは「神韻説」と李杜を除いたことの関連を見てみると、李白・杜甫の詩に漁洋のいう「神韻」に合致するものは皆無であつたのかといへば、決してそうではなく、漁洋自身も、

二大詩人の詩篇に漂う神韻の趣を手ばなしで賞讃している。

或るひと問ふ、一字を著けずして、尽く風流を得るの説を。

答へて曰ふ、太白の詩「牛渚西江の夜、青天片雲無し。

高きに登りて秋月を望み、空しく思ふ謝將軍。余も亦能く高詠す、斯の人聞くべからず。明朝帆を掛けて去らん、楓葉落ちて紛紛たり」と。襄陽の詩「席を挂くこと幾千里、名山都て未だ逢はず、舟を泊す潯陽の郭に、始めて見

王漁洋の『唐賢三昧集』について

る香廬峯。常に読む遠公の伝、永懷す塵外の蹤を。東林見るべからず、日暮空しく鐘を聞く」。詩は此に至りて、色相俱に空たり、政に羚羊角を掛け、跡の求むべき無きが如し。畫家の謂ふ所の逸品は是れなり。

右の文は李白・孟浩然の詩には、ともに神韻の趣溢れる風情のあるものもあつて、画家に言わせれば、逸品とはこのようなものを言うのであると述べ、李白の詩も明らかにその一つと絶讃しているのである。又別に杜甫の詩を讀めてつぎのように言う。

常に杜詩を愛す、「両辺山木合し、終日子規啼く」。又明初の人詩「数家茅屋江水に臨み、一路松風杜鵑響く」は、蜀江の風景を写して、宛然として目に在り。予曾て一聯を擬作す、「子規の声断つ処、山木雨来る時」、又「嘉陵駅路千余里、处处春山畫眉叫ぶ」は、皆眼前の景なり。

漁洋は平生より眼前に広がる実景を詠うことをことさら重要とし、それらの詩篇にこそ、神韻の趣が現れると説いている。

『三昧集』が自ら唱えた「神韻説」を、世に広めることのみ意図して編まれたものであるならば、確かに李白・杜甫の詩篇の中にも、神韻の趣のあるものはあると認めていたのであるから、強いて二家を除く必要はなかつたはずである。人々の間に、李白・杜甫の詩風を模倣することが横行しているまさにその時、その風潮に真向から対立するように、わざわざ二家を除いて、『三昧集』を編んだからには、漁洋には、特に何か意図するものがあつたのにちがいない。

だがしかし、漁洋は少しもそのことに触れず、ただ『百家詩選』の例にならって、李白・杜甫を録さぬ旨だけ「序」に記したのである。つぎにこのことについて、いささか考察を試みたいと思う。

二

王安石の『百家詩選』は、それに附される二家の序¹³によって、長期にわたって散佚していた事実がわかる。それを苦勞の末に全二十巻を復刻したのは、『百家詩選』に序を識す二家のうちの一人、漁洋の終生の友、宋犖（一六三四—一七二三）であり、康熙癸未四十二年（一七〇三）のことであった。

『三昧集』が編まれたのは、『百家詩選』が復刻される十五年も前であり、当然のことながら、見たいと思っても容易に見ることのできない選集で、漁洋といえども『三昧集』選定当時は、まだ見ていず、宋犖が復刻して始めて実見しえたのである。漁洋が『百家詩選』を見るまでのいきさつは、その著作を見れば明らかである。

漁洋の著わした随筆・詩話類を『百家詩選』復刻以前、復刻後に分けて列挙してみると、¹⁴

- ① 『皇華紀聞』四卷（一六八四）
〔『唐賢三昧集』三卷（一六八八）〕
- ② 『池北偶談』二十六卷（一六八九）
- ③ 『蚕尾集』十卷（一六九五）
- ④ 『漁洋文略』十四卷（一六九五）

⑤ 『居易録』三十四卷（一七〇一）
以上が復刻以前の著作であるが、いずれの書中にも、漁洋は『百家詩選』に関する論評は全く載せていない。ただ『居易録』卷十二の中に、漁洋の書簡に答える朱彝尊（一六二九—一七〇九）の返書があつて、朱彝尊はその末尾に「恨安石『百家詩選』無從見之耳」（安石の『百家詩選』だけは、見られなくて残念だ）と述べている。朱彝尊は漁洋と同時の詩壇にあつて、「南北の両大宗」と称された人である。その朱彝尊でも『百家詩選』を見ることは困難だったのである。

つぎに『百家詩選』復刻後の著作を挙げてみると、

- ⑥ 『香祖筆記』十二卷（一七〇五）
- ⑦ 『古夫于亭雜錄』五卷（一七〇六）
- ⑧ 『漁洋詩話』三卷（一七〇八）
- ⑨ 『分甘余話』四卷（一七〇九）

などがある。⑦の『古夫于亭雜錄』を除いて、全て『百家詩選』について論述している。特に『百家詩選』復刻直後に著された『香祖筆記』には最も多く、五条（卷二に一条、卷六に三条、卷十二に一条）も載せている。

復刻以前の著作の中には皆無であつたのに、復刻後は噴き出すような勢いで、『百家詩選』について論じているのは、漁洋が『百家詩選』を自由に見ることができるようになったからにはかならない。又『分甘余話』卷三に、「余新刊の百家詩選を観るに、又尽くは然らず」という一文がある。これはこれまでに王安石の『百家詩選』選定に関する諸説¹⁶があるが、新刊なっ

た『百家詩選』を見ると、諸説がすべて正しいものではないといふことが判つたと述べているのである。

以上のことから、宋肇が『百家詩選』を復刻するまでは、『百家詩選』を漁洋は見えていないものと判断できるのである。

『百家詩選』を見ることもできないのに、それなのに、わざわざ「百家の例に仿ふなり」と記してその体裁を模倣する手がかりをかれはどのようにして得たのであろうか。おそらくは、宋代から多数ある語録・筆記類の記録から『百家詩選』の概略を把握したに違いない。とりわけ嚴羽が『滄浪詩話』考証に論じている『百家詩選』評から、その概略を知つたのであろう。今、嚴羽の『百家詩選』評を挙げてみるとつぎのようである。

王荆公の『百家詩選』は、蓋し唐人の英靈・間氣集に本づく、其の初め、明皇・徳宗・薛稷・劉希夷・韋述の詩に増損は少く無し、次序も亦同じ、孟浩然止だ其の数を増す、儲光羲の後は、方に是れ荆公自ら去取す、前巻これを読めば尽く佳し、其の選択の精に非ず、蓋し盛唐人の詩は観るべからざる者無し、大曆以後に至りては、其の去取深く人意を満たさず、況んや唐人の沈・宋・王・楊・盧・駱・陳拾遺・張燕公・張曲江・賈至・王維・独孤及・韋応物・孫逖・祖詠・劉脊虚・綦母潜・劉長卿・李長吉諸公の如きは皆大名家たり、李・杜・韓・柳は家々に其の集有るを以て、故に載せず、而して此の集にこれ無し、荆公當時選する所は、当に宋次道の所有に拠るべきのみ、其の序乃ち言

王漁洋の『唐賢三昧集』について

ふ、「唐詩を観る者は、これを観れば足る」と。豈に誣ならずや、今人但だ荆公の選する所を以て、斂任して敢へて議する莫し。嘆くべきなり。

漁洋は右の『滄浪詩話』の批判から、『百家詩選』は李白・杜甫・韓愈・柳宗元の四大家を収録していないことを知つたのである。ただこれから編まんとするものが盛唐詩の総集であつたから、中唐期の韓愈・柳宗元にはふれないで、李白・杜甫を除くとのみ記したのである。

ならうのはただ体裁上だけのことであつたので、『百家詩選』復刻以前は、嚴羽の批判を読んで内容の概略は把握していただけれども、それについてはいっさい論述していない。

翁方綱（一七三三—一八一八）は、『石洲詩話』巻五につきのように述べている。

顧俠君の元詩を選する所、凡そ三集、漁洋・竹垞並にこれを称述す。然れども漁洋の称する所は、只だ初集の百家のみ。或ひは後の兩集漁洋未だ見るに及ばざらんや。

この一文は、顧嗣立の選した『元詩選』は三集あつて、漁洋・朱彝尊ともにこれをほめてゐるが、漁洋のほめるのは初集だけである。たぶん後の二集は見えていなかったのではなからうか、と言っている。漁洋は実際に見ていないものは、論評しないとの良識を持っていた。だから『百家詩選』復刻後になつて、はじめて編者安石を攻撃し、『百家詩選』の内容を批判するのである。

たとえばつぎのようである。

介甫が自序に謂ふ、「唐詩を觀んと欲する者は、これを觀れば足る」と、然らんか、否や、世に謂ふ、「介甫は人情に近からず」と、此に見るべし。⁽²⁰⁾

余謂へらく、介甫が一生、「好悪人に拂ふの性なり」と、是の選も亦然り、持平の論に庶幾からんや。⁽²¹⁾

この二つの文章から、明らかに漁洋は安石の人柄を嫌い、『百家詩選』を評価していないことが判る。

しかし、漁洋の王安石觀は『百家詩選』の復刻を契機として轉換したものは考えられない。それ以前から王安石に対しては厳しい見方をしていたに相違ないが、それにもかかわらず『三昧集』を編むときに『百家詩選』の体例を手本としている点に問題があるのである。この点について翁方綱が一つの見解を提出している。

漁洋 『唐賢三昧集』を選するに、李・杜を録さず、自ら云ふ、「王介甫が百家詩選の例に仿ふ」と、此の言は非なり、先生平日極めて介甫が百家詩選を喜ばず、以て好悪人に拂ふの性と為せば、焉くんぞ其の例に仿ふの理有らんや、以て愚竊かにこれを窮ふに、蓋し先生の意、以て人に語り難き者有り、故に已むを得ず、此が為に、詞に託して云ふのみ。⁽²²⁾

「説明しがたい事情があつて、そこで仕方なく安石を口実にしてしまつた（有難以語人者、故不得已爲此託詞云爾）」という翁方綱の意見は、あるいは真実であるかもしれない。「語り難き者」が何かという問題は残るものの、こう解釈してしまえ

ば、それはそれで通るだろう。だが、平素のかれの王安石評からすれば、やはり何か確かな考えがあつて『百家詩選』の体例に言及したと考える方が自然ではなからうか。少なくとも『三昧集』編纂の時点では明らかに『百家詩選』が李白・杜甫を載せないということを是認したからこそ、「仿王介甫百家例也」と記したのである。

いま漁洋の著作中の『百家詩選』評を詳しく検討してみると、王維・韋応物などを除いたことの不満と、安石を誹謗する内容のものばかりであるが、李白・杜甫を収録していない不満は一つも見当らない。『滄浪詩話』の『百家詩選』批判を、そのまま『香祖筆記』巻六に転載する時、嚴羽が、李白・杜甫・韓愈・柳宗元を録していないことにふれた部分を削除しているほどである。⁽²³⁾

結論から言えば、漁洋は司空図・嚴羽の詩觀を繼承して「神韻説」を唱え、そして『三昧集』を編纂したのであるが、その際にかれが提示しようとした「神韻」は必ずしも嚴羽等の考えていたものとは少し異なっていて、『百家詩選』の李杜排除の方がより自説に近いと感じたのではないだろうか。『百家詩選』への言及はしかるべき意味をもっていたと考えたいのである。

このことを考えるためには、漁洋と嚴羽との關係を見直してみなければならぬ。確かに漁洋の嚴羽に対する尊敬は並々ならぬものがある。

たとえば、『古夫于亭雜錄』巻三で「今、將に五十年、往事を回想するに、真に平生第一の知己なり」と述べて、自ら秘か

に師と仰ぎ、敬う錢謙益（一五二八—一六六四）が、『滄浪詩話』を批判したとして、

羚羊挂角 跡の求むべき無きが如きは、乃ち不易の論なり。而れども錢牧齋これを駁す、非なり。²⁵

と激しく批難しているほどである。又、『百家詩選』を論じて、嚴羽と自らの論が一致したとして、「予の前論と暗合すること符節の若し²⁶」と述べたり、嚴羽の論への心服ぶりは甚だ大きい。しかしながら、一方では嚴羽の過大なまでの李白・杜甫の評価にいささか容認しがたいと思いが、漁洋にはあつたらしく思われる。

嚴羽は李白・杜甫をつぎのように評価する。

其の大概に二有り、曰く、「優游迫らず」、曰く、「沈着痛快」。詩の極致に一有り。曰く、「入神」。詩にして入神せば、至れり、尽せり、以て加ふる蔑し。唯だ李・杜のみこれを得、他人のこれを得るは、蓋し寡し。²⁷

この嚴羽の李杜のみ入神の論は、明らかに古文辞派の李白・杜甫のみを佳しとしてならうの風潮を煽る一因になつたのであつた。漁洋はそのような李白・杜甫一辺倒の当時の詩界の風潮を好まなかつたし、当然のことながら、李白・杜甫のみならず、王維・孟浩然も極致に達する詩人であると強く主張していたのである。だからこそ、

沈着痛快は、惟だ李・杜・韓昌黎にこれ有るのみに非ず、乃ち陶・謝・王・孟よりして下、これ有らざる莫し。²⁸

と述べ、嚴羽の李白・杜甫への過大な評価に水をさしている。

王漁洋の『唐賢三昧集』について

『三昧集』が世に出れば、漁洋は批判を受けることを予測していたに相違ない。なぜかといへば、当時の詩壇は漁洋の弟子張雲章が『蚕尾詩集』巻首の序にいうごとく、

雲章嘗て向の詩を為る者を見るに、人尽く曰ふ、「我が師は盛唐」と、声響・泪喪・性靈を規摹すること已に甚し。

という状況であつたし、漁洋も又『然燈記聞』に、

吾、蓋し夫の世の盛唐に依附する者を疾む。但だ学んで「九天闔闔」「萬國衣冠」の語を為るを知るのみにして、自ら高華と命め、自ら矜りて壯麗と為す、これを按ずるに其の中に毫も生氣無し。故に『三昧集』の選有り。

と述べ、強く盛唐詩崇拜の風潮を批判し、豪放・華麗な詩風の横行を批判して、『三昧集』選定のいささつを記しているからである。

漁洋は決して李白・杜甫の詩を否定するわけではないが、ただ李白・杜甫の豪放・華麗或いは雄渾・悲壯の詩篇にのみ心を向けている詩壇の風潮を黙認するわけにはいかなかつたのである。

これこそ『百家詩選』が李白・杜甫を取らなかつたことを是とし、みずからの集にも二家の詩を収めず、主として王維・孟浩然らの詩篇を収めて、本来あるべき盛唐詩なのだということを示した理由だろう。

敢えて極言するならば、『三昧集』は、康熙詩壇のある種の改革を意図して、編まれたものであると言えるかもしれない。当時の詩壇に及ぼした『三昧集』の影響、あるいは「神韻説」

とのより詳しい検討は後日の課題であるが、ひとまず司空図・敵羽の詩観及び『百家詩選』と『三昧集』との関係を漁洋の詩論と深く関わるものとしてとらえたいのである。

注

- (1) 『唐賢三昧集』や「神韻説」についての当時の議論や批判は、本文中に引くほかにも、宋肇の『漫堂説詩』、閻若璩の『潜邱劄記』巻五、趙執信の『談竜録』、李重華の『貞一齋詩話』、趙翼の『甌北詩話』巻十などに見られる。
 - (2) 「漁洋山人自撰年譜」(惠棟定字撰『漁洋山人精華録訓纂』の巻末に附される)によれば、康熙三十六年丁丑(一六九七)六十四歳の時、戸部尚書に、三十八年己卯(一六九九)六十六歳の時に刑部尚書に任ぜられている。
 - (3) たとえば、宋肇は『漫堂説詩』の中で、杜の「海涵地負」、韓の「鼈擲鯨喙」に至りては、尚ほ未だ逮ばざる所有り、と論じている。
 - (4) 李白・杜甫の詩風については、吉川幸次郎著『元明詩概説』(岩波書店)十六世紀 明の中期の二 古文辞の時代に、韓愈の詩風については、清水茂注『韓愈』(岩波書店)解説に詳しく述べられている。
 - (5) 漁洋晩年の弟子であり、『漁洋精華録』を編録した詩人。
 - (6) 清の宗室であった文昭、字は子晋が、康熙辛丑六十年(一七二一)に、漁洋の定した『古詩選』『万首唐人絶句』
- (7) 『十種唐詩選』『唐賢三昧集』を一つにまとめ、『広唐賢三昧集』としたものである。
 - (8) 近藤光男著『清詩選』(集英社)王士禛、一六三ページによる。
 - (9) 『漁洋詩話』巻中(『清詩話』上冊)。
 - (10) 『分甘余話』巻四。
 - (11) 漁洋は平素から、詩を論ずるのも、画を論ずるに等しいとの主張を持っていた。その主張は『蚕尾集』巻七「芝廬集序」の中に詳しい。
 - (12) 『香祖筆記』巻四。
 - (13) 『香山』『即目』「恵山の下に鄒流綺過訪す」「焦山にて曉に程昆崙の京口に還るを送る」「早に天寧寺に至る」などの詩を挙げて、「皆一時、竹輿の言、味外の味を知る者は、当に自らこれを得べし」と述べている。
 - (14) 『唐百家詩選』には、選者王安石の「王荆公唐百家詩選序」の他に、乾道己丑四年(一一六九)に識された倪仲傳の序、康熙癸未中秋(一七〇三)に識された宋肇の序がある。今ここでいう二家とは、倪仲傳、宋肇をいう。
 - (15) 『漁洋山人自撰年譜』による。
 - (16) 『漁洋山人自撰年譜』によれば、漁洋は康熙二十六年丁卯(一六八七)五十四歳の時、すなわち『三昧集』を編む前年に、『十種唐詩選』を刪定している。朱彝尊にあてた書簡とは、この選に序を書いて欲しい旨依頼したもので

ある。

(16) ここでいう諸説とは、「遼齋聞覽」「西清詩話」(ともに『茗溪漁隱叢話』前集、卷三十六)、宋晁公武撰『郡齋讀書志』宋邵博撰『聞見後錄』などを指している。

(17) 何文煥輯『歷代詩話』(中華書局)に収める『滄浪詩話』は、考證に作るが、胡鑑注『滄浪詩話』(広文書局)は詩證に作る。

(18) 古人の論じた『百家詩選』評で、いちばん長文で書かれたものは、『滄浪詩話』である。郭紹虞『滄浪詩話校釋』(人民文学出版社)二四六ページに、「此の後、王漁洋も亦屢ば此の選を議すれば、則ち更に滄浪の陳説を襲取すと述べている。

(19) 嚴羽は「觀唐詩者、觀此足矣」と記するが、『王荊公唐百家詩選』巻首に附す原序も、『臨川先生文集』巻八四に収録される「唐百家詩選序」も、「欲知唐詩者、觀此足矣」に作る。

(20) 『香祖筆記』巻六。

(21) 「好惡拂人之性」は、『大學』に見える語。「人の惡む所を好み、人の好む所を惡む、是れ人に拂ふの性と謂ふ」とある。

(22) 『漁洋詩話』巻中。

(23) 「七言詩三昧拳隅」(天讓閣叢書『小石帆亭著録』巻第五)。

(24) 『香祖筆記』巻六には、嚴羽の「李・杜・韓・柳は家

王漁洋の『唐賢三昧集』について

家に其の集有るを以てす、故に載せず」の一文はない。

(25) 『池北偶談』巻一七、談芸七。

(26) 『香祖筆記』巻六。

(27) 『滄浪詩話』巻一、詩辨。

(28) この一文は、『蚕尾集』巻七「芝廬集序」の中に見えるが、吳煊退庵・胡棠甘輯註『唐賢三昧集箋註』(広文書局)は、漁洋の序の末尾に黃培芳(字は香山、『清史列伝』七三)の跋文を附して、その中に引用されている。

漁洋他日畫を論ずるに因りて、詩を論ずるの旨を發明す、以て古澹、閑遠にして中實、沈着痛快は、これ俗流の能く知る所に非ずと為す、又云ふ、沈着痛快は惟だ李・杜・韓昌黎にこれ有るのみに非ず、乃ち陶・謝・王・孟にして下これ有らざる莫しと、此の集を讀む者は、當に此の意を知るべし。

(29) 「九天闔闔、宮殿を開く」「萬國衣冠、冕旒を挿す」は、王維の七言律詩、「賈至舍人の早に大明宮に朝するの作に和す」の二句である。